

関口愛 論文内容の要旨

主 論 文

Association between high psychological distress and poor oral health-related quality of life (OHQoL) in Japanese community-dwelling people: the Nagasaki Islands Study

日本人地域住民における心理的苦痛と口腔関連 QOL 低下の関連：長崎五島研究

関口愛, 川尻真也, 林田秀明, 長浦由紀, 延末謙一, 野中文陽, 山梨啓友,
北村雅保, 川崎浩二, 福田英輝, 岩崎理浩, 齋藤俊行, 前田隆浩

Environmental Health and Preventive Medicine, In Press
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科先進予防医学共同専攻
(主任指導教員：前田隆浩教授)

緒 言

精神的健康度が低い集団では、口腔衛生状態が不良で口腔関連 QoL (Oral health-related quality of life; OHQoL) が低下していることが知られている。しかし、一般地域住民における精神的健康と口腔衛生状態及び OHQoL の関連についての報告はない。本研究の目的は、健診受診者を対象に心理的苦痛と口腔衛生状態及び OHQoL の関連を検討することである。

対象と方法

五島市住民健診データを用いて横断研究を行った。調査項目は性別、年齢、BMI、既往歴（脳卒中、虚血性心疾患、高血圧、糖尿病、脂質異常症）、喫煙歴、飲酒歴、社会的活動（1年以内の転倒及び入院、運動習慣、近所付き合い、近所以外の付き合い、趣味）、心理的苦痛（Kessler 6 scale; K6：高いほど不良）、口腔衛生状態（残存歯数、未処置歯数、歯周ポケットの深さ（Probing Pocket Depth; PPD）、クリニカルアタッチメントロス（Clinical Attachment Loss; CAL）、歯周病ステージ、6ヶ月以内の歯科通院歴）、OHQoL 指標（General Oral Health Assessment Index; GOHAI：低いほど不良）とした。対象は、2015～2017年の健診受診者 3,742名のうち、データ欠損例を除く 1,183名（男性 455名、女性 728名）とした。K6が5点以上を K6 高群、5点未満を K6 低群として、各調査項目の 2 群間比較を行った。名義変数についてはカイ 2 乗検定を用い、連続変数については t 検定を実施した。口腔衛生状態と OHQoL の関連は、名義変数については t 検定を実施し、連続変数については相関分析を行った。さらに GOHAI に独立して寄与する変数を特定するために重回帰分析を行なった。統計

解析ソフトは JMP® 14 (SAS Institute, Cary, NC, USA)を用いて、両側検定を行い、有意水準は $p < 0.05$ とした。

結 果

平均年齢 (SD) は 65.9 (11.7) 歳で、K6 高群の割合は 125 人/1,183 人 (10.6%) であった。K6 高群の割合は、男性に比べて女性が有意に高かった ($p=0.006$)。K6 高群は K6 低群と比べて、1 年以内の転倒 ($p < 0.0001$) 及び入院 ($p=0.006$) がある割合が有意に高く、運動習慣 ($p < 0.0001$)、近所付き合い ($p < 0.0001$)、趣味 ($p=0.025$) がある割合が有意に低かった。また、K6 高群は K6 低群と比べて GOHAI が有意に低く ($p < 0.0001$)、mPPD ($p=0.16$) 及び mCAL ($p=0.053$) がそれぞれ大きい傾向を示した。GOHAI は残存歯数 ($r = 0.17, p < 0.0001$)、未処置歯数 ($r=-0.14, p < 0.0001$)、mCAL ($r=-0.09, p=0.003$)、6 ヶ月以内の歯科通院歴 (平均;あり vs なし, 55.6 vs 56.2, $p=0.025$) と有意な関連を示し、mPPD ($r=-0.04, p=0.16$)、進行した歯周病 (55.4 vs 56.1, $p=0.06$) と関連する傾向を認めた。K6 及び GOHAI と有意な関連を示した変数を説明変数として、GOHAI を従属変数とした重回帰分析を行った結果、K6 は独立して GOHAI と有意な負の関連を認めた ($\beta=-0.23, t=-8.12, p < 0.0001$)。

考 察

精神的健康度が低い集団では、口腔衛生状態を悪化させる危険因子として、口腔衛生行動維持の意欲低下や薬剤性の口渇などが報告されている。本研究において、心理的苦痛は社会活動低下と有意な関連が示され、さらに口腔衛生状態の悪化と関連する傾向を認めた。一般地域住民においても、心理的苦痛は社会参加活動だけではなく、日常的な口腔衛生行動も低下させている可能性が示唆された。

また、本研究において OHQoL と口腔衛生状態は有意な関連を認めたが、心理的苦痛は口腔衛生状態と独立して OHQoL と有意に関連することが示された。先行研究の結果から、OHQoL 低下を引き起こす、医学的に説明できない歯痛や口腔乾燥症などの口腔関連症状を訴える患者では、心因的背景を考慮すべきであることが指摘されている。本研究において、一般地域住民においても、心理的苦痛が高いと OHQoL が低下していると感じやすいことが示された。一方で、先行研究において精神的健康度が低い集団では、そうでない集団と比べて、歯科受診の頻度が低いと報告されている。本研究の結果でも、心理的苦痛が高い場合、OHQoL が低くても歯科を受診しない可能性があると考えられた。定期的な歯科受診は歯の喪失リスクを低下させることが知られていることから、一般地域住民においても、心理的苦痛の高い集団に対して定期的な歯科受診を勧めることが重要と考えられた。